

国語 その一（七枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

（注）母を亡くした中学二年生の「僕」と四つ下の妹「菜月」は、父と共に、家族で暮らしていた東京から、九州の小さな町にある母の実家（中村家）の祖父母に呼ばれて、一緒に暮らすことになった。

学校から帰ってから、僕はよく外を歩いた。前はどうかやって時間を過ごしていたのだったか、もう思い出せなかった。ふらふらと歩いていくと、アーケードのついた商店街があった。人通りはあまり多くない。雑貨屋があり、花屋があり、クリーニング屋があり、その向こうに本屋があった。

少し、思い出した。「前」のこと。僕は本が好きで、「前」はよく本屋に行つたのだ。父さんが家で本を読むのを見たことがないから、僕はきつと母さんに似たんだらう。そう思ったら、もう駄目だった。せっかく入った本屋で、本の背表紙がちかちかしてうまく読み取ることができない。雑誌のコーナーをまわり、新刊の台を通り過ぎ、「当店のおすすめ」となっている棚から一冊、二冊、手に取って、また戻す。読みたい本がない。何を讀んでいいのかわからない。

母さんのせいだというのはわかっていた。母さんが亡くなって、世界は色を失った。匂いが消え、音が遠くに聞こえ、何かが手に触れる感覚も鈍った。読みたい本など見つからなくて当然だった。

だけど、僕は思いのほか困っていた。シーソーに乗っていて、相手が下へ、僕が空中へ上ったときに、急に相手が下りてしまったみたいなの、このままだと急降下して尾てい骨をシーソー越しにずがんと地面に打ちつけることになるかとわかっていて、それでも手も足も出せない。ほんとうは、両足をシーソーより先に下ろして踏ん張れば、体重を支えることができる。痛い目に遭わずにすむ。そうわかっていて、手も足も出せずにいる。いや、出さないでいるのだ。僕の意思にかかわらず、僕の身体は動くことを拒否する。

うまくやらなければ、無駄な痛みは避けなければ、と思っっているのに、身体がいうことを聞いてくれない。店の奥は、児童書のコーナーだった。菜月に何か買って帰ってあげよう。「前」には、彼女はよく児童書のコーナーで目を輝かせてあれこれ手を伸ばしていた。今はきつとそんな力もない。僕は知っている。彼女が「マイパン」蒲団の中で泣いて、声を殺して泣いて、やがて泣き疲れて眠るのを。菜月のくぐもった*嗚咽が聞こえてくると、僕はやりきれない気持ちになる。かわいそうだと思うし、自分のことがかわいそうにも思えるし、何より母さんのことがかわいそうにも思えてきて、もう何をかわいそうがっていいのかさえわからなくなった。

ふと顔を上げると、棚の向こうから、女の子がこちらを覗いていた。

目が合って、あわてて逸らした。なつかしいような顔だった。心臓がどくどく音を立てていた。同じ学校の子だろうか、と思っただけれど、すぐに違ふと気づいた。制服が違う。でも、同じ歳くらいだと思う。もう一度、そつと顔を上げると、彼女もこちらを見た。またすぐに視線を落とす。目が合うのははずかしくて、彼女を見ていることが知られるだけでもはずかしくて、それなのに気になってまた見てしまう。

この感情が何なのか、僕にはわからなかった。彼女の姿を見たくて、本を選んでいるふりをしながら何度も様子を窺った。彼女は手に持っていた本を棚に戻すと、最後に一度こちらを振り返ってから、その場を離れた。

彼女が見ていた棚のところに行ってみる。どの本を見ていたのか探してみる。これかな、と手に取って、戻して、もう一度手に取って、それから考え直す。もしかしてあの子がここに戻ってきたら、僕が持っているところを見られるのはとてつもなくはずかしい。

*嗚咽……声をつまらせて泣くこと。

国語 その二（七枚のうち）

やつぱり戻そう。そう思った瞬間、彼女がそこに立っていた。「それ、おもしろいよ」

何もいえずに突っ立っている間に、彼女はにっこり笑って、今度こそほんとうに店を出て行ってしまった。

僕はその本を買った。

それが火曜日だった。金曜に、また本屋へ行った。キタイせず（キタイせず）に店に入ると、こないだと同じ場所に彼女が立っていた。

「こないだは、ありがとう」

僕は勇気を振り絞ってお礼をいった。

「本を読んだのは、すごく久しぶりだった」

口にする、それがどんなに大きなことかがわかった。本が好きだったのに、そんなことすら忘れていた。

「もしも、あの本が気に入ったのなら」

彼女は棚のほうを向き、ちよつと時間をかけて何冊か選んだ。それを僕に手渡すと、しつかりと目を見て微笑んだ。笑顔の意味はわからない。でも、心臓が早鐘を打っていた。彼女が店を出ていくと、僕はお小遣いをはたいて、四冊全部を買った。

次に会ったのは、翌週の月曜だった。

「もう全部読んだの？」

彼女はうれしそうに笑った。うーん、じゃあ、今度はどうしようかなあ、などといいながら棚の間をまわってゆく。僕も一緒に歩いた。どんな本が好きかぼつぼつと話しながら店内を一周すると、彼女の腕には何冊かの本が抱えられていた。文庫が三冊にハードカバーが一冊。ハードカバーか。お年玉からお金を持ってきたから、買えないわけじゃない。だけど、ちよつと困った。

「これ、女ものじゃない？」

「女ものって」

彼女は首を振って笑った。ふと、どこかでこんな笑い方をするひとを見たことがある、という思いが頭をかすめた。

「洋服じゃないんだから、本に男ものも女ものもないと思うよ。でも、もしも気に入らなかつたら、妹さんにでもあげて」

そうか、妹にか、と思うのとほぼ同時に疑問が浮かんた。妹がいることを話したつけ。話していない、と瞬時に思う。妹のことを話す暇はなかった。妹に限らず、家族のことは話していなかった。だって家族の話したら、母さんのことを話さなければならなくなってしまう。

でも、目の前にいる彼女が弾んだ声で話すので、僕の心は浮き立った。浮かんだ疑問はゆらゆらとどこかへ消えてしまった。

どうして彼女からはこんなになつかしい匂いがするんだろう。彼女の横顔をこっそりと盗み見ながら考えた。なつかしさがどんな成分でできているのか知らないけれど、うれしいとか、よろこばしい、たのしい、肯定的な気持ちに、せつない、はずかしい、といった身を縮めたくなるような感情も混じっているのだと思う。少なくとも、僕には、彼女になつかしさを感じてしまったことに対する妙な後ろめたさがあった。

名前を聞きたかった。彼女のことを知りたかった。でも、聞いていいものかどうか、迷った。通りすがりなのだ。見たことのない制服を着ているから、きっとこの近くの学校ではないのだろう。

「どうもありがとう」

国語 その三（七枚のうち）

本屋を出たところで、僕はあらためて彼女にお礼をいった。昼間でも薄暗いアーケード街には、歌詞のない歌が流れていた。

君は、といいそうになったのを飲み込んだ。なんと呼べばいいのかわからなかった。

「……買わなくてよかったの？」

主語を「バブ」いて聞くと、彼女は穏やかにうなずいた。

「ええと、名前、なんていうの？」

思い切って聞くと、ほんの少し間が空いた。

「平凡な名前。つまんないよ。中村っていうの」

中村さん。すぐく平凡だというわけでもないけれど、たしかにこの町には中村さんが多いようだった。

クラスにも中村がいて、先生の中にも中村はいた。

そのとき、歩道の向こう側を、こちらをちらちら見ながら歩いてくる学生服姿が見えた。がっしりしていて、髪がくろぐろと多い。そうだ、たしか上別府というやつだ。同じクラスにいながら口をきいたこともない。日焼けした顔に太い眉毛、声が野太くて、豪快に笑う。いかにも運動部の人間らしく、いつも友達に囲まれてクラスを中心にいた。

「どうかした？」

彼女が僕の視線を追って振り返る。

「なんでもないよ」

ぶつきらぼうない方になった。女の子といるところを見られるのは決まりが悪い。いろいろとまずい、と直感がささやいていた。中二の秋になって転校してきて、東京の言葉を使い、馴染もうともしない、ひよろつとした転校生。僕になど、いま通っていった上別府はキョウミもないだろう。しかし、放課後、商店街を女の子と歩いているとなれば、好奇心を刺激されたとしてもおかしくない。

「急に黙っちゃったね」

中村さんがいった。

「そんなことないって」

まだ声に変な力が入っていた。

「誰？」

「え？」

「さつき通っていったの、知ってる子なんでしょ。同じクラスのひと？」

どうしてそんなことを聞くんだろう。誰だっけいいのに。少し、面倒だった。黙ってうなずいた。

「じゃあ、どうもありがとう」

僕は話を打ち切るようにして、手を振って別れた。

翌日、昼休みに図書室へ行こうと廊下へ出たところで、上別府に呼び止められた。

「園田、昨日本屋の前に行こう」

「やっぱり。面倒くさいことになった。」

放っておいてくれ。そういいたかったけれど、いかなかった。

「いたよ」

いたのは事実だ。本屋の前で、中村さんと話していた。それをひやかしたり、からかったりされるのはいやだ。だけど、堂々としていようと思った。堂々としていなければ、彼女に悪いような気がした。

「店から出てきたところを見てた」

「そうか」

国語 その四（七枚のうち）

それは僕も知っていた。僕たちのほうをちらちら見ていたじゃないか。「何を買ったんだ」

「なんでもいいだろ」

愛想のない口調だったと自分でも思う。上別府は鼻の頭に皺を寄せた。

「そりゃ、なんでもいいけど。おもしろい本があったら、普通に教えてくれたっていいんじゃない」

そういうと、教室へ入って行ってしまった。

彼女のことはいわれなかった。てっきり何かいわれるだろうと思っていたから、拍子抜けした気分だった。

廊下を戻り、教室へ入った。真田や中村たちと話している上別府に、後ろから声をかけた。

「重松清」

「え」

上別府はふしぎそうに僕を見た。

「おもしろい本」

僕がいうと、ああ、と表情を崩した。

「わかった。読んでみる」

そういつてうなずいた。

放課後、にぎやかな生徒玄関で靴を履き替えていたところに、白いタイソウ服の上別府たちが来た。これから部活でランニングでもするのだろう。下駄箱に伸ばしかけていた手を引いて先を譲ると、小さく、サンキュ、といつて笑った。

たったそれだけのことだ。だけど、びっくりした。サンキュといつて笑うだけで、上別府が僕を嘲笑うとはしていないことがいっぺんにわかった。僕はゆっくりと歩きながら、走っていく上別府たちの後姿を見た。

その週はいろいろ忙しかった。

まず、中間テストがあった。答案はすぐに採点されて戻ってきた。学年で一番の成績だったけれど、達成感もよろこびもない。何の感慨もなく、僕は答案を靴にしまった。

テストが終わると球技大会だった。球技大会といっても、生徒数が少なくて、各学年でバレーとバスケットのチームをひとつずつつくったら、それでおしまい。公平のため、部活にない種目で競うことになっているそうだけど、経験者がいないから試合らしい試合にもならなかった。

僕はバレーにもバスケットにも縁がなかった。それでも、前の中学にいた頃、転校直前まで体育の授業はずっとバレーだった。どちらかには出なければならぬというので、バレーを選択した。チームのキャプテンは、上別府だった。

上別府は、運動神経がよかった。同じコートの中になると、それがよくわかった。リーダーシップもあった。彼の指示で、僕たちは動いた。もつとも、動いているつもりで身体は全然ついていけなかったのだけだ。

僕がボールを拾えなくても、サーブをネットに引っかけてしまっても、上別府は怒らなかった。疲れてぼんやりしていたときだけ、ボール見ようぜ、と声をかけられたくらいだ。

「セッターに向いてるんじゃないか」

大会の後で上別府にいわれたときは、何の話かわからなかった。

「手首がやわらかいから、コントロールがいい」

上別府がほめるものだから、まわりのやつも同調した。園田の上げたボールは打ちやすいとか、頭がい

国語 その五（七枚のうち）

いから指示役のセッターにはちようど向いているのだとか。

もちろん、真に受けたわけではない。驚いたし、そんなはずはないとも思った。けれど、なんだかくすぐったい気分だった。ほんとうにセッターに向いているかどうかは別として、同級生たちとの距離が、一気に縮まった感じがした。

本屋にはなかなか行けなかった。

本を読む以外にもやることがある。それは、新鮮な驚きだった。登下校のときに誘われたり、休み時間話しかけられたり、他愛もないことばかりだったけれど。

「重松清、読んだよ」

上別府がいった。

「え、もう？」

「兄貴が文庫で一冊持ってた。『その日のまえに』っていうんだ。すげえよかった」

僕は黙ってうなずいた。その本は内容紹介を読んだだけで棚に戻した。「その日」を過ぎてきた僕には、その本は読めない。きつと死ぬまで読めないだろう。

「しっかし、渋いよな。親父の趣味か？」

いや、と僕は首を振った。父さんは小説を読まない。

「こないだ、本屋の前で会ったときに一緒にいた子。あの子に教えてもらった」

なにげなさそうに話したけれど、ほんとうは思い切って告白したつもりだった。しかし上別府は首を傾げた。

「一緒にいた子？ 誰だそれ」

僕は上別府の日に焼けた顔をしげしげと見た。わざと話をはぐらかしているのだろうか。

「ほら、黒いセーラー服の、同じ歳くらいの子」

「黒いセーラー服って、今どきないだろ。どこの古めかしい学校だよ」

今度は僕がきよんとする番だった。そういわれてみれば、セーラー服を着ている子自体を見かけない。うちの学校も白いシャツにグレーのスカートだ。もう少し寒くなれば、その上にブレザー。

「じゃあ、あれはこの制服なんだろう」

僕がいうと、

「何いってんだおまえ」

上別府は声を上げて笑い、鞆を肩にかけて部活に行ってしまった。

その夜、僕はぼんやりと考えた。もしかしたら、彼女は遠距離通学をしている高校生なのかもしれない。ほとんど根拠はないが、そうスイソクして結論づけることにした。もしも彼女が何らかの理由で自分の学校の制服を着ているのではないのだとしても、その理由はわからなかった。考えてもしかたがない。それよりも、彼女のすすめてくれた本はどれもおもしろかった。そのことが大事なんだと思った。思おうとした。

寝る前に蒲団の中で読む本は僕を遠いところへ連れていってくれる。バレーボールは飛んでこなかったし、青々と晴れ渡る空も出てこなかったし、中村さんも姿を現さなかった。

本を閉じた。バレーボールも青い空もどうでもいいけれど、彼女には登場してほしい。彼女に会いたい、と思つた。

（宮下奈都の文章による。なお、本文には一部略したところがある）

20	受験番号
中	

国語 その六（七枚のうち）

問一 「僕は本が好きで、『前』はよく本屋に行ったのだ」とあるが、どうして今はそうではないのですか。

問二 「僕が持っているところを見られるのはとてもなくはずかしい」とあるが、なぜ「はずかしい」のですか。

問三 「やっぱり。面倒くさいことになった」とあるが、どういうことですか。

問四 「堂々としていなければ、彼女に悪いような気がした」とあるが、それはどうしてですか。

